

不朽の名作『悪人』から10年 ——
毎日出版文化賞、大佛次郎賞

作家生活 20周年をかざる

新たな最高傑作

国宝

上 青春篇
下 花道篇

吉田 修一

鳴りやまぬ拍手と眩しいほどの光、
人生の境地がここにある。

2018年9月7日(金)

全国書店にて発売予定

朝日新聞出版10周年記念作品

すべての人に、価値ある一冊を

ASAHI

朝日新聞出版

TAKE
試し読み
FREE

一九六四年一月一日、長崎は料亭「花丸」

侠客たちの怒号と悲鳴が飛び交うなかで、

この国の宝となる役者は生まれた。

男の名は、立花喜久雄

任侠の一門に生まれながらも、この世ならざる美貌は人々を巻き込み、
喜久雄の人生を思わぬ域にまで連れ出していく。

舞台は長崎から大阪、そして、オリンピック後の東京へ。

日本の成長と歩を合わせるように、技をみがき、道を究めようともがく男たち。

血族との深い絆と軋み、スキャンダルと栄光、幾重もの信頼と裏切り。

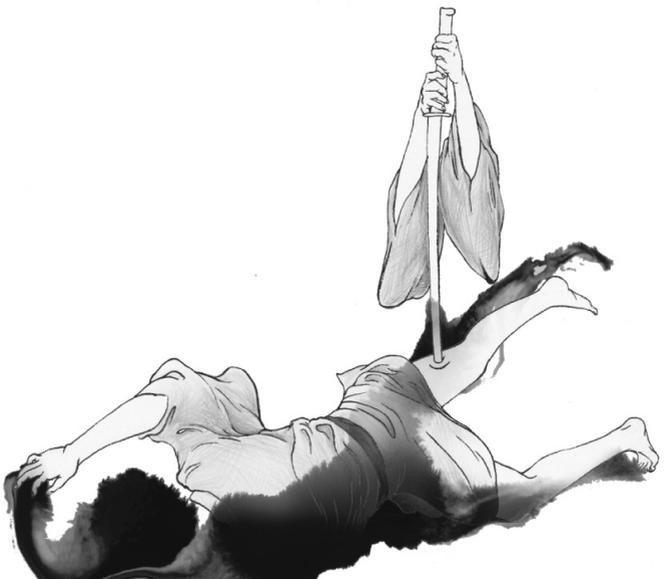
舞台、映画、テレビと芸能界の転換期を駆け抜け、数多の歓喜と絶望を享受しながら、
その頂点に登りつめた先に、何が見えるのか？

《昭和二十九年正月。

大雪のなか、長崎の老舗料亭で立花組の新年会が盛大に開かれた。

その席で組長立花権五郎の中学生のひとり息子、喜久雄らは歌舞伎舞踊の名作『積恋雪関扉』を見事に演じる。しかし、

権五郎は敵対する宮地組の急襲を受け、命を落とすのだった——》



画：東幸

第一章 料亭花丸の場

その年の正月、長崎は珍しく大雪となり、濡れた石畳の坂道や晴れ着姿の初詣客の肩に積もるのは、まるで舞台に舞う紙吹雪のような、それは見事なボタ雪でございました。

この大雪のなか、長崎は丸山町にある老舗料亭「花丸」に、次々と黒塗りの車が到着いたします。車寄せから、黒瓦に白漆喰の正門へ延びる石畳の通路には、立花組の若衆がずらりと居並び、黒紋付の正装で次々に降りてくる親分衆を、

「ご苦労さまです」

と恭しく迎えますと、その声だけでなく、若衆たちの白い息も揃います。

到着の車が途切れても、若衆たちは極寒のなか直立不動のままですが、冷え切った指をこっそりと揉んだり、感覚のなくなった足の指を締めたりと、小さな暖を貪ります。

この年に限らず、ここ料亭花丸で行われる立花組の新年会は、それは盛大なものでした。

招待されるのは、戦前からの名門、宮地組の大親分を筆頭に、戦後、興行師として名を上げた熊井勝利の流れを汲む愛甲会、また佐世保の平尾組に、島原の曾田組、さらに立花組組長、権五郎の兄弟分たちが福岡や佐賀からも集まりますので、親分衆だけでもざっと十五、六名、そこに幹

部やその女房、子供たちまで加わりますから、大広間の「鶴の間」と「鷺の間」の襖を取っ払いまし
ても、膳を囲む膝と膝とがぶつかり合うほどでございます。

ちなみにこの料亭花丸、江戸期の寛永十九年、一六四二年と申しますから、ちょうど幕府がスペイ
ン、ポルトガル船の来航や日本人の海外渡航を禁じまして、オランダ人を長崎の出島に移したのが前
年の一六四一年ですので、日本がいわゆる鎖国状態になったばかりのころに創業しております。とは
いえ、鎖国という寒々しい言葉とは裏腹に、ここ長崎丸山は江戸の吉原、京都の島原とともに栄えた
三大遊郭とも呼ばれておりまして、かの井原西鶴が、長崎に丸山という所なくば、上方の金銀、無事
に帰宅すべし、と謳っております通り、さぞ華やかな時代だったのでございましょう。

この料亭花丸、幸いにも原爆の甚大な被害からは免れまして、昭和三十五年といえますから、大雪
となったこの年の四年まえには県より史跡として指定され、史跡料亭という全国でも珍しい形態で営
業しております。

ちょうど料亭花丸の建つ坂の途中に検番がありまして、このころは丸山新五人組と呼ばれた名妓た
ちが婀娜な姿で人々の目を引いておりました。ちなみに初代の丸山五人組のなかには、「長崎ぶらぶ
ら節」でその名の残る芸者、愛八がおります。

親分衆が到着するころには、鶴の間、鷺の間ともに、客たちもずらりと揃っております、まだ年
端もいかぬ子供たちが座敷の広さに興奮して走り回り、あちこちで大人の手に捕らえられそうになっ
てはまた逃げ回ります。

普段は腹巻きにジャンパー姿の組員たちもこの日ばかりは背広姿。年末に近所の床屋で刈らせた頭

も清々しく、その横ではフランスの女優のような化粧に、髪を高く結い上げた女房たちが、あちらこ
ちらに顔を向け、年賀の挨拶に忙しくしております。

そのうち、いよいよ黒紋付の立花権五郎が、芸者ばりの黒留袖の女房マツを伴って現れますと、こ
の時ばかりは座敷も水を打ったように静まりますが、毎年恒例、権五郎がここで破顔一笑いたしまし
て、

「『新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事』。皆さん、新年、あけましておめでとうござ
います。まさに、この初春に降りつもる今日の雪は予祝であろうと思えます。さて、迎えました昭和
三十九年、オリンピックもございます。立花組は皆様方のお力添えのもと、限りなき栄光を目指して
躍進あるのみでございます」

と挨拶しますと、座敷のあちこちから、「おめでとうございます」の野太い声とともに新年会の幕
が上がるのです。

権五郎が席につきますと、早速グラスにビールが注がれ、名門宮地組の大親分の音頭のもと、乾杯
と相成ります。

この宮地の大親分、戦前から続く名門侠客一家の大親分とはいえ、戦後は時代の移り変わりのな
かでその立場を変えておりました、娘婿などの身内を県議会や市議会に送り込み、土建屋を営む本人
は実業家然としております。

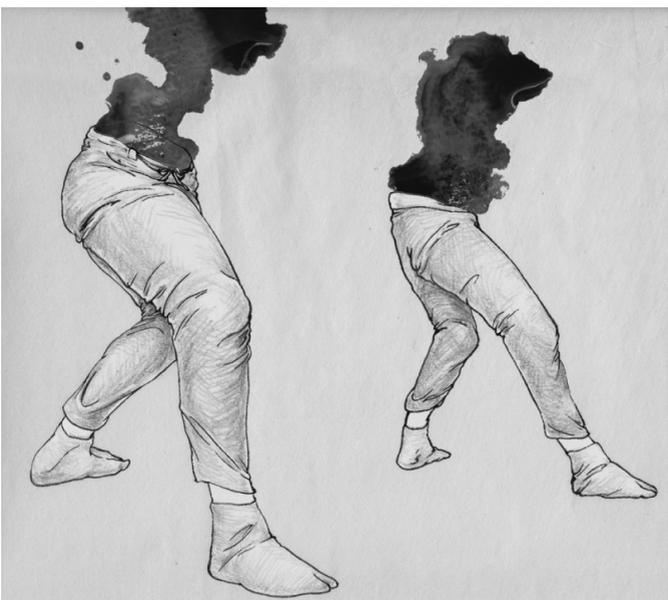
権五郎とは、戦後の混乱期に二分八の兄弟盃を交わした仲であります、今となっては誰が見て
も任侠世界での立場はその逆で、二分が宮地の大親分、八が権五郎の立花組でございます。

《立花組の組長だった父を亡くし、
天涯孤独になった中学生の喜久雄。
組が勢いを失っていくなか、
父と対立した組織の長をドスで襲うが、
失敗に終わる。やがて長崎を離れ、
大阪で暮らすことになる》



画…束芋

《長崎で運命的な出会いをした歌舞伎役者、
二代目花井半二郎邸に住み込み、
修業を始めた喜久雄。半二郎の息子俊介と共に、
「踊りを骨で覚える」という
厳しい稽古をこなしていく。
やがて同郷の春江も、
長崎から大阪に出て働きはじめる》



画…束芋

《花井東一郎として、
初舞台を踏んだ喜久雄。
地方巡業の場に出るようになり、
やがて、ともに修業している
俊介との共演が評判になる。
それが興行会社「三友」社長の目に留まり、
京都南座での主役に
抜擢されることになるのだった——》



画・束芋

第五章 スタア誕生

「俊^{しゅん}ぼん、何してんねんな！ もう幕開くで！」
宿^{ふつかよ}酔^よいの醜^{みにく}態^{たい}を晒^{さら}しまして楽屋へ這^はうようにやってきました俊介に、呆^{あき}れ果^あてておりますのは、
すでに『二人^に道^{どう}成^{じやう}寺^じ』の白拍子^{しらびやうし}花子^{はなこ}になりかけの喜久雄でございます。
なりかけと申しますのは、もちろん支度途中のこととして、羽^は二^{ふた}重^{えん}に白塗^{びやく}り、眉^{まゆ}の下にはうっ
すらと紅が入り、羽織^{はねおり}っておりますのは、目を奪^{さら}われるような金箔^{きんぱく}をあしらった黒地^{くろぢ}に枝垂^{しだれ}桜^{ざくら}の
大振袖^{おほびらそで}でございます。

その姿での叱^{しつ}責^{せき}ですので、役柄そのままに町娘から一足早く本性を見せまして、大蛇^{おほへび}に変身^{へんしん}
てしまったようでございます。

「まあまあ、喜久ぼんも押さえてえな。とにかく若旦那が来たんやから、ほら、支度や！ みな
急ぎや！」

俊介をいつものようにかばう源吉に、

「また、そうやって甘やかす……」

と、納得^{なつ}いかない喜久雄ではありますが、ここで揉^もめていても幕は待ったなしでございます。

「松蔵さん、バケツに水持ってきてえな！」

喜久雄の声に黒衣の松蔵が早速バケツの水を用意しますと、まだ酔っている俊介の首根っこを掴みまして、その頭を窓の外へ突き出させ、

「早くで！」

バケツの水をぶっかけます。

「ヒェ！」

俊介の悲鳴が、四国は琴平ののどかな朝に響き渡ります。現在二人は花井半二郎を大看板とした一座で、西回りの巡業の真っ最中なのでございます。

水を浴びますと、さすがに俊介も目が覚めたようで、鏡台に飛びつきまして、遅刻した自分を罰するように太い刷毛で顔に白粉を塗りたくります。

「ホテル中みんなで探したんやで。どこにおったん？」

横で喜久雄も紅をといてやりますと、

「目え覚めたら、どこぞの飲み屋の床やろ。びっくりしたわ」

「また、そんな呑気なこと言うて」

俊介の話によれば、昨夜、喜久雄たちと別れたあと、また一人でふらふらと琴平の歓楽街へ向かったらしく、

「せやけど、昨日は、なんやパーツと氣い晴れたわ」

慣れた手つきで眉を描きながら、俊介がまだ酒臭い息を吐きます。

酒臭い娘道成寺の白拍子など興奮めですが、化粧をしてしまえばなんとかそう見えてくるから不思議なもの、

「あの愛甲会の辻村さん、一緒におつてあんなに気分が晴れ晴れする人おらんわ。昨日かて琴平中の芸者あげての大宴会やったし、ええなあ、喜久ちゃんも子供のころからあんな人らに囲まれて育ったんやもんな。なんやそれだけで人生が倍くらい楽しいもんに見えそうやわ」

口も動いておりますが、俊介は習慣でちゃんと手も動かしております、羽二重、衣裳と、徐々に支度も喜久雄に追いついてまいります。

今回の舞台、少人数での巡業ということもありまして、女形舞踊の最高峰とも呼ばれます『京鹿子娘道成寺』を、若い喜久雄と俊介が二人で踊るといふ趣向になっております。

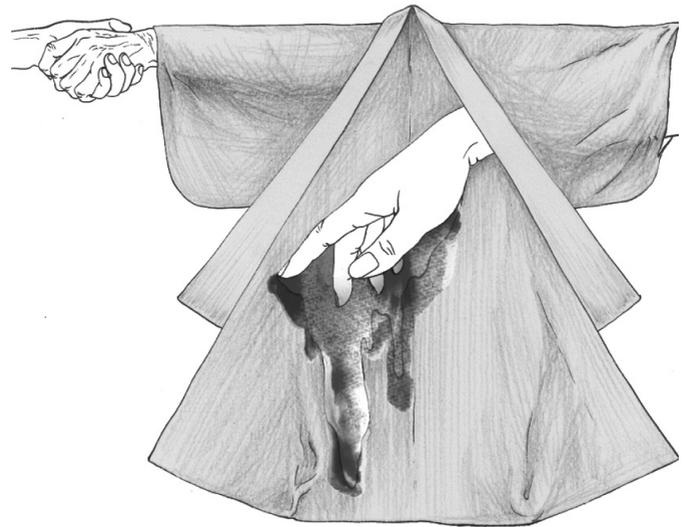
さて、遅ればせながら、慌ただしく始まりましたこの第五章、成功を夢見た徳次が北海道へ旅立ちました前章から、すでに四年近くの月日が流れております。

時はまさに世紀の祭典「大阪万博」が先月開幕したばかり、日々の入場者数、月の石、全自動人間洗濯機に、外国人の迷子が見つかった話まで、日本全国隅から隅まで万博の話で持ちきりでございます。

ちなみにこの四年の間に、喜久雄は養母のマツとも相談の上、結局、半二郎の部屋子となっておりまして、昭和四十二年、十七歳の年、京都南座の興行にて、「花井東一郎」を襲名し、『伽羅先代萩』の腰元という端役ではございましたが、めでたく初舞台を踏んでおります。

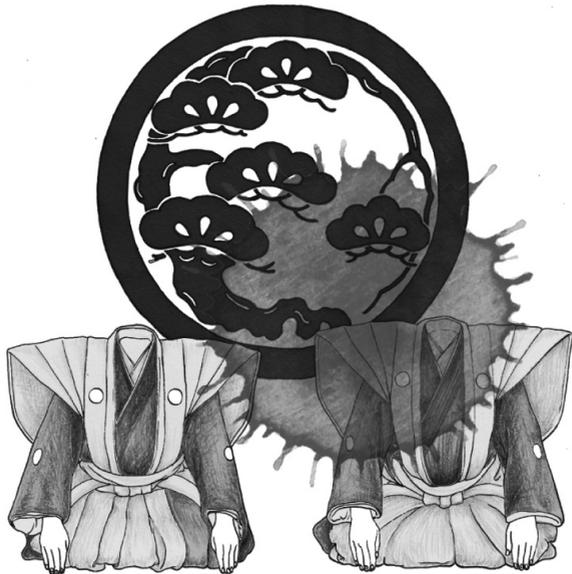
ただ、このめでたい初日の記憶が、喜久雄にはまったくと言っていいほどございません。

《喜久雄と俊介による京都南座での『二人道成寺』は大成功。そんな折、大阪中座で『曾根崎心中』の「お初」を演じることが決まっていた花井半二郎が、交通事故に遭い複雑骨折してしまう。ところが、半二郎の代役は息子の俊介ではなく、喜久雄が演じることになり、その舞台も評判のまま千種楽を迎えるのだった》



画：束芋

《喜久雄に先を越されるかたちとなった俊介は、春江を連れて大阪から出奔。一方で、喜久雄の人気も長続きはせず、役者として中途半端な時期を過ごす。そんななか花井半二郎は白虎を、喜久雄は三代目半二郎を同時襲名することに。しかし、披露の初日、白虎は舞台の上で吐血してしまう——》



画：束芋

第七章 出世魚

さて、その激励会からあつという間に月日は経ちまして、いよいよ本日は、二人の本拠地であります大阪中座での襲名披露興行初日でございます。二人の楽屋には、花、花、花。「おめでとうございます！」「おめでとうございます！」と、次々に楽屋を訪れる関係者に、半二郎、東一郎とともに、「ありがとうございます！」

と挨拶を交わしておりますのは幸子でありまして、つい今しがたまでロビーでの鼯肩筋への挨拶を済ませ、『連獅子』のまえにまずは襲名の口上へ向かう二人が丹波屋の紋付に着替える様子を、浴衣をたたんであげたり、楽屋履きの草履を並べたりしながら、誰よりもそわそわと見守っております。「喜久雄、袴のすそが裏返ってるで」

言うが早い、喜久雄が足を上げて確かめるとマも与えず、自ら直しにいく幸子でございます。横の鏡台では半二郎が何度も唇を舐めながら、口上の台詞をブツブツと繰り返しております。役者に年齢はないとは分かっているながらも、決して若くない夫のその湿った赤い唇がまだ色っぽく見えるのですから、自分の連れ合いはやはりいい役者なのだと思つて幸子であります。

こういうとき、つくづく歌舞伎役者というのはその家族も含めてのことだと幸子は感じます。舞台に立つのは役者一人ですが、たとえばジャングルを生き抜く獣の一家のようなものでして、総元締めである三友のような興行会社や劇場、鼯肩筋に観客やマスコミなど、外敵にも味方にもなる相手から

家族全員で身を守り合い、戦い、生き抜いていかなければならないのでございます。

いわゆる梨園とは唐の時代にあつた宮廷音楽家の養成所の名ではありますが、実はそのように優雅なものではなく、傍目には歌舞伎役者の家族というのはどこも仲良さそうに見えるようでございますが、それはまさにジャングルの獣の一家と同じで、仲が良いのではなく、この生き死にかかった世界を、一丸となつて生き抜いていかなければならないからでございます。

その後、楽屋から客席に向かいました幸子は、一階の入り口扉を開けますと、客の邪魔にならないように壁際に立ちまして、高鳴る柝の音とともに勢いよく開く定式幕を祈るように見つめます。

幕の開いた舞台に居並ぶのは、花井半二郎改め花井白虎を中央に、東一郎改め三代目半二郎、そして生田庄左衛門を筆頭に関西歌舞伎の大幹部役者たちでございます。

満員の客席からは中座を揺らすような万雷の拍手。

「丹波屋！」「白虎！」「半二郎！」「三代目！」

飛び交う大向こうのなか、庄左衛門を始めとする挨拶が始まりますと、幸子の視線が動いた客席に、涙を拭う喜久雄の母マツの姿でございます。思わず、我が子俊介をその客席に探す自分に気づき、込み上げてくるものを無理に呑み込む幸子、正直、嬉しさよりも口惜しさが多ございますが、それでも今は何よりも役者の女房なのでございます。

重厚なものから軽妙洒落なものまで大幹部俳優たちの挨拶が順に終わりますと、いよいよ白虎と三代目半二郎の挨拶でございます。

漲る緊張感のなか、まず面を上げました三代目半二郎、徐ろに客席を見渡しまして、

「いずれも様のご尊顔を拝しまして、恐悦至極に存じます。只今は、ご列席の皆様からお言葉を賜りまして……」

緊張気味な喜久雄の口上に客席は固唾を呑んでおりますが、音はなくとも劇場破れんばかりの拍手が鳴り響いております。喜久雄の凜とした清潔さをまえに、この場に立ち会っている誰もが新しい時代の幕開けを自分たちが目の当たりにしているという興奮なのでございます。

大喝采のなか、喜久雄の挨拶が終わったそのときでございました。本来なら白虎が面を上げる場面なのでありますが、俯いたまま、なぜか動きがありません。舞台上に居並ぶ俳優たちに、そして満員の客席のあいだに不穏な空気が流れたまさにそのとき、なぜか無念の形相で面を上げた花井白虎が、その口から大量の鮮血を吐いたのでございます。

《その後、喜久雄と俊介は、

ときに地を這い、ときに脚光を浴びながら、

それぞれに役者としての技を磨き上げ、芸の道を究めていく。

二人の陰影に富む人生は、

果たしていずこへと向かうのか——》

喜久雄は幸せな人生だったのか——「国宝」連載を終えて

吉田修一

最終回を書き終えた今も、まだ喜久雄のことばかりを考えている。銀座の大通りで車のヘッドライトを浴びた姿を思い浮かべながら、彼は幸せだったろうか、幸せな人生だっただろうか。

俊介を失ってからは、芸に精進するあまり、応援してくれる客の姿も見えなくなり、孤高の芸術家の常として最後はファンよりもアンチの方が多かったのかもしれない。とすれば、人気役者としては失格である。ただ、そんな不器用な役者の姿が、私には、父親の仇を討とうと、朝礼の途中で駆け出したあの少年の姿にずっと重なっていた。

連載中、読者からお手紙を頂いた。そこにはあたたかい励ましの言葉があり、熱い拍手があった。孤立する喜久雄を、劇場の片隅で静かに応援してくださる真のご贔屓の方々だった。

彼が幸せだったのか、幸せな人生だったのか、いくら考えても、その答えが私には分からない。稀代の女形の幸福というものが一体どんなものなのか、常人の私には思いも及ばない。ただ、三代目花井半二郎という役者に出会えた私は幸せだったと、今、心から言える。

今回の連載では、多くの方々にお世話になった。日々寄り添ってくれた担当者をはじめ、美醜のあわいを見事に挿絵で表現してくださった束芋氏、また歌舞伎の監修を引き受けてくださり、その豊穡な世界を丁寧に教えてくださった児玉竜一氏にはいくら感謝しても足りない。

そしてなによりこの方、四代目中村鴈治郎さんとの出会いがなければ、「国宝」は生まれていない。今から三年ほどまえ、歌舞伎役者を主人公にした小説を書くこうと思っていると相談した初対面の私に、鴈治郎さんは、なんと私用の黒衣の衣装を作ってくれた。

「これを着てれば目立たないから、いくらでも舞台裏を見ればいいよ」と。
以来、毎月のように私は鴈治郎付きの黒衣の一人として、歌舞伎座はもとより、全国の劇場をついて回った。

あいびきという役者用の椅子を持たせてもらい、楽屋から舞台へ、奈落から花道の鳥屋へと、鴈治郎さんやお弟子さんたちと一緒に夏も冬も駆け回った。

舞台裏で見たのは、役者たちの汗だった。花道の鳥屋で聞いたのは、鳴り止まぬ拍手だった。そして、舞台上で嗅いだのが、歌舞伎の、いや、喜久雄の香りだった。

さて、いよいよ最後となりますが、長きにわたりまして、この「国宝」に付き合ってくださいました読者のお一人お一人様に、心からの感謝を申し上げます。
誠に、幸せな一年五カ月でありました。

(朝日新聞 二〇一八年六月三日付)

一九六八年長崎県生まれ。

九七年に『最後の息子』で第八十四回文藝界新人賞を受賞し、デビュー。

二〇〇二年には『パレード』で第十五回山本周五郎賞、

『パーク・ライフ』で第百二十七回芥川賞を受賞。

純文学と大衆小説の文学賞を合わせて受賞し話題となる。

〇七年『悪人』で第六十一回毎日出版文化賞と第三十四回大佛次郎賞を受賞。

一〇年『横道世之介』で第二十三回柴田錬三郎賞を受賞。

主な著書に『さよなら溪谷』『平成猿蟹合戦図』『路』

『怒り』『橋を渡る』『犯罪小説集』『ウォーターゲーム』ほか多数。

「国宝」特設サイト <https://publications.asahi.com/kokuhou/>

小説、映画ともに
大ヒットした不朽の名作

【新装版】

悪人

吉田 修一

福岡市内に暮らす保険外交員の石橋佳乃が、
出会い系サイトで知り合った土木作業員に殺害された。

二人が本当に会いたかった相手は誰なのか？

佐賀市内に双子の妹と暮らす馬込光代もまた、
何もない平凡な生活から逃れるため、
携帯サイトにアクセスする。

そこで運命の相手と確信できる男に出会えた光代だったが、
彼は殺人を犯していた。

彼女は自首しようとする男を止め、
一緒にいたいと強く願う。

光代を駆り立てるものは何か？

その一方で、被害者と加害者に向けられた
悪意と戦う家族たちがいた。

悪人とはいったい誰なのか？

事件の果てに明かされる、殺意の奥にあるものは？

毎日出版文化賞と
大佛次郎賞W受賞

著者の
代表作

